

『シロハラのご馳走』

桑原紀子

雪の残る二月の庭に、珍客がやってきました。そっと窓からのぞくと、ツグミくらいの大きさの鳥が地面にいました。渋いオリーブ色の背中に、細かい斑点のある白い胸、鋭く長いくちばしが目立ちます。そのくちばしで、地面の朽ち葉を次々にひっくり返しては、凄いい勢いで散らかしています。双眼鏡でじっくり観察しました。どうやら餌の虫を探しているようです。この寒さで朽ち葉の下に虫はいないのか、あちこちの朽ち葉をひっくり返しては、ポイポイ放り投げ、ちょっとやけになっている感じです。今度は万両の赤い実を見つけて食べています。少しはお腹が足りたのか、飛んでいきました。



図鑑を見たら、冬鳥としてシベリア辺りから渡ってくるシロハラでした。庭に来たのは初めてです。又来ないかなと、思っていたら、次の日から、朝と夕に姿を見せるようになりました。滞在時間も長くなって、30分以上も庭で過ごすようになりました。臆病で、林の中に単独でひっそりという・・・と、書いてあるのに、ある日、窓のすぐ

そばまで来るのです。窓の中の私に気づくと、あわてて逃げますが、しばらくたつと、また飛んできます。臆病どころか大胆な行動に、私ははっと気づきました。窓の傍の棚に、古くなったサルトリイバラのリースを、捨てようと思って出していたのです。もう数年前の物ですが、大きな実が固まって付いています。もしかしたら、シロハラにとって魅力的なご馳走にみえたのかもしれない。いない時に実をほぐしてみたら、パサパサに乾いてちっとも美味しそうでないの、気の毒になりました。でもシロハラは、明らかにその実を狙って、危険を冒して、窓の傍の棚まで飛んできます。そしてついに、ある日、リースの実は一粒もなくなっていました。

それから、数日シロハラは庭に来て、朽ち葉をひっくり返していましたが、少し春めいた頃、ぱったり姿を見せなくなりました。ある日庭に出てみると、散らかした朽ち葉の現場がそのまま残っていて、まだそこにシロハラがいるように思っていました。